K

現代の文学＝6

井伏鱒二集

珍品堂主人
駅前旅館
多甚古村
集金旅行
さざなみ軍記
開墾村の与作
屋根の上のサワン
鯉
山椒魚
厄よけ詩集

河出書房新社

現代の文学6　井伏鱒二集

© 1965

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和 40 年 10 月 1 日　初版印刷
昭和 40 年 10 月 8 日　初版発行

定価　390円

著　　者　井伏鱒二
発 行 者　河出朋久
印 刷 者　高橋武夫
装　　幀　原弘(N.D.C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社

電話東京 (292) 大代表3711
振替口座　東　京　10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

珍品堂主人……三
駅前旅館……九一
多甚古村……一九五
集金旅行……二七一
さざなみ軍記……三一五
開墾村の与作……三九〇
屋根の上のサワン……四〇一

鯉……四〇六
山椒魚……四一〇
厄よけ詩集……四一六
年譜……四三九
解説……佐伯彰一……四四七

挿画　宮田武彦
写真　三木淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

井伏鱒二集

珍品堂主人

珍品堂主人は加納夏麿という名前です。年は五十七歳、俳号は顧六です。戦前には、ちゃんとした学校の先生でしたが、戦後、ふとしたことから素晴しい古美術品を発見して、爾来、骨董を取扱う商売に転じたのです。掘出しもの——それを見つけて自分の所有物としたときの魅力に憑かれたのです。何と致しようもない病みつきです。当人に言わせると、自分は美術鑑賞家であり、俳人でもあり、商業美術の上でも一家をなしているというのですが、以前からの知りあいたちは、現在のところ骨董屋だと思っているようです。よく珍品や風変りな品物を掘出すので、誰が言い出したともなく珍品堂主人と通称されるようになって今日に及んでいるわけです。

戦争が終って、その翌々年のことでした。寒いときで、正月のことでした。そのころはまだ伊豆の下田の町に疎開したままで、生活のために温泉旅館の支配人をやっていましたが、以前に赤坂で芸者をしていた女から手紙が来たので東京へ出て来ました。是非とも逢いたいから逢いに来てくれという手紙でした。それで当時まだ東京に残していた自分の家のことで用件もあったので、それとの兼ねあいで久しぶりに東京に出て来ました。新橋駅に下車して、進駐軍のジープが走るのを見て先ず思ったことは、自宅のことに関する用件だけならば自分は東京に出るのではなかったということでした。女はそのころ新橋駅の近くで闇料理屋をしていましたが、その日は午後から商売は女中任せにして、新橋駅の東側の出口に来て三時間も待っていたそうでした。綺麗にお化粧して、当時としては贅沢なメルトンの黒いコートに毛皮の襟巻をしていました。

「ああら、先生。とうとう来て下さいましたのね」

それが久しぶりに逢った女の最初の言葉です。そのあとは、二人づれでどこへ行くあてもなく歩きながら、主に女の方がぽつりぽつりとお店の自慢話をするだけでした。悪くないものでした。お店の繁盛を自慢するくらいだから、色けの方で呼出しをかけたものだとわかりました。

しかし戦後のごたごたした復興最中の街だから、下田へ疎開している者には様子がさっぱりわからない。どこに御商談向きの旅館があるのやら、どこにどんな店があるのやらわからない。相手は不断から無口な女です。お店の常連客のことやお客同士の喧嘩沙汰など、遠慮がちに話しながらついて来るだけで、思いきって寄り添って

来るのでもない。ところが虎の門の停留所が見えだしたとき、

「あたし、戦後の浅草をまだ知らないんです。このごろの浅草は、戦前と違って却って安心な街になっているんですって」

女がそう言ったので、

「では浅草へ行ってみるかね。観音様の焼跡を見て、最悪の場合は映画でも見て帰ろうか」

と地下鉄に乗ろうと思って虎の門に来ると、古道具屋があるのでショウウィンドをちょっと覗きました。すると一尺四方くらいな赤い花毛氈を敷いて、下げ燈籠を一つ置いてある。鉄の打物だけれども、六角型で火屋の窓が古建築の蔀戸みたいな造りになっている。実に見事だ。震いつきたいほどでした。全財産を投じても買おうと思いました。胸が動悸をうちはじめていました。無論、女がそばに寄って来たためではないのです。

この店は鍋山という道具屋です。そんな古美術品などを売る店ではないんですが、進駐軍相手のけばけばした焼物を並べてそれが一つ置いてある。正札を見ると三万五千円です。だが、悲しいかな金がない。そのとき財布に八千円くらいしか持ってなかったので、女を連れていることだし、どうしたものかと迷いました。胸算用したりしながらこう思いました。

この女の肩と俺の肩が殆ど触れあっている。女のやつ、気持のいい脂粉の香を漂わしている。今、この女をここに待たしておいて、俺は店の親爺に掛合って、他のやつに売らないように頼んでみるか。しかし半分以下の手金では顔を縦には振るまいな。掛合が長びくだけだ。すると女が待ちくたびれて店のなかに入って来る。俺の掛合ぶりが案外なんで嫌気を起す。もし親爺が、八千円の手金で承知するとすれば、こちらの財布が空になる。女に映画を見させてやることもできないではないか。今、この場はそっとしておいて、明日また出かけた方がいい。へたなことして、親爺に売り惜しみをするようにさせては拙いのだ。

そう思ったので、後髪を引かれる思いで女を連れて浅草に行きました。

観音堂の焼跡を見て、ボン引みたいな女を冷やかすような真似しながら曖昧屋に入って、バラック建の離れで早めの夕飯を食べました。それから、女が新橋まで帰るのを送って行って、横浜の宇田川という道具屋へ金策に行きました。下田に帰っても急な金策は覚束ない。温泉旅館の支配人と言ったって、女房づれで一室を当てがわれて食わしてもらっているだけでした。

この宇田川というのは、仏教美術の目利に長けている道具屋です。横浜の大蒐集家小山元亭先生の骨董のお

師匠さんです。同時にまた、若いころの珍品堂――つまり学校先生時代の加納顧六にとっても骨董のお師匠さんです。在野では大した目利とされている道具屋です。

「おや、どうしたんです」

宇田川がびっくりして見せるので、

「金を借りに来た。明日の朝までに貸してくれ、至急入用のことがあるんだ」

そう言うと、バラック建の茶室に通してくれました。そのときの話はこう言ったような工合でした。

「今日は久しぶりに東京に行って驚いた。室町時代の下げ燈籠に三万五千円の正札が付いてるんだ。それが見つかったから金を貸してくれ」

「あぶねえな。燈籠は贋物ばかりだからあぶないですよ」

「それじゃ、俺のところの古器物を売ってやろう。いつかお前さんが売ってくれと言ってたね。あの室町の机と、それから藤原の箸置だ。この二点で三万五千円」

「あの漆塗りの机なら拝見しましたが、箸置はまだ拝見しませんですな。焼物でしょうな」

「そりゃそうだが、補修があるんだ。ずいぶん補修がしてあるが、机の上に置いたって李朝の水滴なんかよりゃ気が利いてるよ」

「現品を見なくっちゃ、何とも言えねえな。では、あんたと一緒に東京へ行って、現物の下げ燈籠と正札を見くらべた上でのことにしますかね。あんたが机と箸置を手放した、燈籠は偽物であったと来ちゃ、お互に物笑いの種だからね。今晩はここへ泊って、明日の朝、一緒に出かけましょうや」

それでは大助かりだと、その茶席に泊めてもらいました。翌朝、宇田川と一緒に東京行の電車に乗りましたが、もしあれが売れてたらどうしようかという気持と、もし宇田川がけちをつけたらどうしようかという気持でいっぱいでした。もし、けちをつけられたら、机と箸置のほかに、戦前に宇田川から買った江戸時代の碁盤も添えてやろうという腹でした。

燈籠は無事でした。ショウウィンドにあるのを硝子越しに見て、

「これだ」

と言うと、

「駄目です」

と鸚鵡返しに言う。

「そんな筈はない。がっかりさせないでくれよ。じゃ、なかに入って見せてもらおうよ」

なかに入って「見せてくれ」と言うと、親爺は奥にいて、息子がショウウィンドから応接間のテーブルの上に持って来て見せてくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

間近く見ると、素晴しい金味です。受台の裏には漆が塗ってある。すべて古い打物はそうですが、錆びないように念を入れて作ったもので、銘も彫ってありました。応永二十二年乙未年、一月の何日、漢詩が彫ってあって、越後国何郷何村となっている。献燈したのは一遍宗の信者らしくて願主は満阿弥となっている。日付もある。大変なものだと思いました。

奉納が応永時代のことだから、たたらを踏むとき願主が傍にいてお経を読んでいたかもしれないです。そうして、お経を読みながら感激の極、いけにえとして、身につけている金銀の装身具を、たたらの砂鉄を鎔かしたなかに入れたかもしれないです。さもなくても、刀を鍛えるように打って打って鍛えあげ、それを組立てて作った打物です。刀の鍔よりもまだ確かな鉄だから、ちょっとやそっと雨ざらしにしても錆びたりするようなことはない。

しかるに宇田川は、

「いけないな。あんたの目はどうかしているね。これじゃあ仕様がねえ。笠に補修はしてあるし」と、けちをつけるのです。

補修なんかしてないのですが、

「じゃ、補修がしてあるとして、それでは値段に少しぐらい艶をつけてもらうかね。いったい幾らにしてくれる」

と鍋山の倅に聞くと、親爺に相談しに奥に入って行ったので、その間に二人は話をつけました。けなす方の宇田川は、笠に補修がしてあるばかりでなく、てっぺんの空輪と、受台の下の脚がどうも変だと言うのです。

それに対して珍品堂は、

「そんなことはない、絶対そんなことはない。もし贋だったら、約束の古器物のほかに、この前お前さんのところから貰った碁盤も添えるから」と折れて出て、

「じゃ、承知しました」と契約を成立させました。

そこへ倅が奥から引返して、

「それでは一万円お負けいたしまして、二万五千円にいたします。親父が言っていますが、それ以上はお引きできません」

そう言ったので、珍品堂は宇田川の出してくれた二万五千円の金を払いました。

親爺が礼を言いに出て来たので、どこからこれが出たのかと聞くと、京都の可部という株成金のところから出たそうでした。燈火の器を集める道楽があった人でしょう。その人が亡くなったので、未亡人が一括して売ったのです。いい道具はいい道具屋へ売り、ぼろ道具で仕方がないと思う物をごみとして鍋山へ売ったのです。そのとき鍋山は、いろんな燈籠を三十燈ばかり買ったそうで

すが、そのうちで目ぼしいのは、この室町の燈籠と、もう一つ桃山時代の燈籠だったと言っていました。しかし桃山なら、どこへそれを売ったと、目の色を変えるほどのことはないのです。

珍品堂は出来あいの箱を鍋山に譲ってもらって、大事な買物を納め、セロファンの切屑を詰めて用心堅固に自分で縄をかけました。それから二人で外に出ると、宇田川が田村町の折口という金物屋へ寄るというので珍品堂もつきあいました。その道すがら宇田川が言うのです。

「どうも、幾ら考えても可笑しいね。あなたという人が、贋物を持つことはないだろう。あなたのような目利が持つ物じゃありませんよ。なんだったら、のりになりましょうか」

のりというのは、二人またはそれ以上の人間が協同で何かすることです。催合と同義語です。

珍品堂は宇田川の内心がわかったので、

「お前さんが、贋物ののりなんかになる必要ないだろう」と話を逸らせました。

それと言うのが、宇田川は田村町の折口金物商店へ燈籠を納めようと思いついたのです。折口商店は日本でも有数な金物屋で、たとえば扉の精巧な鍵だとか扉のハンドルだとか、煖炉の焚火道具だとか、洋風建築に必要な部品を作らせて売る店で、洋風建築の精巧な金具類は、たいていの建築師がこの店に頼っている。大変な金持です。ここの旦那が骨董が好きで、宇田川は出入りの骨董屋だものですから、室町の燈籠を折口旦那に納めたいと言うのです。しかし偽物の燈籠をつかませようという魂胆でなくって、金物としての絶好な参考品を納めようというわけだから、やはり旦那に忠義を尽すつもりであったのです。

珍品堂は燈籠を東京の自宅に置いて下田に引返し、温泉旅館の勤めは女房に任せることにして、その翌日、自分だけ東京の自宅に移りました。掘出し物に味をしめて心機一転したのです。新橋で料理屋をしている女に心をひかされているためもありました。

宇田川には室町の机と箸置だけ譲って、燈籠の真贋が確定するまで約束通り碁盤は譲渡保留にしておきました。これが宇田川の心証を悪くしたようです。心証を悪くしたとすれば、一日も早く燈籠を偽物だと確定させたい気持もあったでしょう。あれは銘があるからいけないと言って、骨董屋仲間や出入りの旦那の間に告げ歩くので、あいつ、あんな贋物を買いよって、と珍品堂のことは悪評嘖々です。あいつ、馬鹿なもの買いよって、二万三万でそんな燈籠があるものかと物笑いの的でした。

尤も、そのころは偽物の製造が盛んでした。平等院の風鐸とか、春日神社の油差とか、埴輪だとか、いろんな

偽物が出回っているときでした。平等院の風鐸には、銘が入って年月日まで彫りこんである。これは主に関西方面に出回っていましたが、色も紅の真新しい紐をつけたりして新しい桐の箱に入れてある。どんな素人が見たって首をかしげる代物です。だから銘の入っている下げ燈籠だと聞かされると、実物を見ない者は、神社仏閣の軒に下げるという話から平等院の贋の風鐸を連想するでしょう。おや、あの風鐸と同じ手のものかと思うだろう。そう思われるとすれば、当人は全くやりきれない気持である。よろしい、今にまた何か珍品を掘出してやる。そういう気も湧いて来たのです。

そのころの贋物と言ったら無茶でした。つまり需要者の方で見さかいがつかないのです。春日神社の油差についても、ずいぶん人をくった話がありました。本来、この油差は、お茶道でやかましいから、骨董品としてもやかましい器物です。竹が節のところから二本の細い枝を出している。竹を節つきで筒切りにして、その節の細い枝をほんの少し残し加減に切って、しかしその先に残した皮をずっとそいで、ぐるぐると筒に巻きつける。昔、春日神社で燈籠の油皿に油を差していた道具です。幾つも立ち並んでいる常夜燈に付随する器具ですが、現存するもので一ばん古いのは足利期のものでしょう。今、松永さんが懸花活として古いのを一つ持っている筈ですが、もし、こんなものが売りに出されるとしたらお茶人が怖いほどの凄い値をつける。ところが、変な道具屋が「油差なら、ありまっせ。必ず、或るところから見つけますから」と言う際は、模造師に頼んで模造させているのです。作った新品を二年くらいも川底かどこかに埋めておいて、真物と区別がつきにくいようにしてから持って来る。同業の骨董屋でも、がくんと食らいついて騙されることがないとは限らない。

こういう模造品は殆ど全部が或る県の或る町で作られるのですが、その町の或る大きな道具屋では、補修専門の職人を使って古器物を修理させている。模造のうまい腕達者な職人を使っている。こんな職人には模造品の注文が多いから、模造品の製法も次第に発達するのが道理です。しかし骨董屋の見損いから、ろくでもない物を名品あつかいにする滑稽なことも出て来ます。

まだ戦争中のことでしたが、珍品堂が横浜の宇田川のところへ行くと、宇田川が桐の箱に入れた火箸を見せたことがありました。竹の柄がついていて、先が打物になっている火箸です。柄のところが春日神社の油差の製作手法に似て、竹の枝の皮がぐるぐる巻いてある。これもお茶道でやかましい道具です。宇田川は更紗の袋に入っている火箸を恭しく箱から取出して、

「これは足利期のお燈明差の花活と同じ手法だから、足

利の美術品です。間違いない」

固くなってそう言うので、見ると足利期の油差の手法に似通って、同じように落着いた古色を持っている。値段は幾らだと聞くと、

「巡査の月給一箇月分です」

と言うのです。

シンガポールが陥落した直後のころのことで、国民は前線の兵士の労苦を偲んで自粛するようにと言い聞かされていた当時です。明るい廊下に持って出て虫眼鏡で念入りに見てみました。すると、ほんのちょっと赤い色が見える。竹の柄にぐるぐる巻いた皮が一箇所すこしゆるんでいる。そこのところに漆か何かの赤い色がちょっと見える。それで買わずに帰って来たものの、しかし真物かもしれないと思いながら、幾らの日数を過したかしれません。

それから暫くたって王子製紙の羽村さんのお宅へ伺うと、応接間の支那火鉢にその火箸が差してある。宇田川のやつ、このお屋敷へ出入りを始めたなと思って、その火箸で炭のつかみ工合を試していると奥さんがお茶を持って来た。

「奥さん、失礼ですが、この火箸はどういう経路から、ここにあるのでございます」

珍品堂はそう言ったが、ちょっと開きなおったような口吻でした。しかし奥さんは、何のこともなさそうに言うのです。

「その火箸は松坂屋で買って参りました。お気に召したら差上げますよ。うちには、それと同じ手の新しいのが五組ございますから」

珍品堂はぎくりとして生唾を呑むだけでした。デパート品が古くなって味が出たもので、宇田川は春日神社の油差を知っているから欲で引っかかったのです。珍品堂も正に引っかかろうとしたのですが、お互に竹で作った柄に目がくらまされて、先の打物に目をとめなかったのも変なものでした。

それで珍品堂は、ざまあ無いねという気持で、横浜の宇田川のところへ行って、

「お前さん、とんでもない物を見せたじゃないか」

それを言い出す前に、

「やはり、あの火箸は売ったかね」と聞きました。

「売った。あれから間もなく売った。あんた、買おうたってもう遅いよ」

「誰に売ったんだ。まさか、巡査の月給一箇月ぶんで売ったんじゃないだろうな」

ところが巡査の月給一箇月ぶんで、小石川の八重山という骨董屋に売ったというのです。

八重山というのは、目が利く上に太っ腹の男だから、

大きく売ったり買ったりして今では巨億の金をためています。宇田川と言い八重山と言い、とかくこういうたちの道具屋は、天才的な目利がそうであるように勘に頼りすぎている。独自な道を歩いて行きますから、世にある在りふれたものは面白くない。独特な物を見つけることに興味を覚えます。売立会や展示会にさらされて、多くの人の目に触れた品物には大して食指を動かさない。この傾向は多少とも旦那衆の間にも行きわたっているようです。

珍品堂の友人のうちに、天才的な目利の男で山路孝次という男がいます。これは骨董屋ではなくって洋画家ですが、珍品堂が学校先生時代から骨董好きの仲間としてつきあって来た親しい友人です。仲がよすぎるためか、お互に相手を口惜しがらせて喜んでいる間がらです。いつかも珍品堂が、うんと山路に腹を立てさせたことがありました。この二人は碁を打つときにも口喧嘩をする。山路は珍品堂よりも六目くらい弱いんですが、下手の横好きだから口惜しがって言ったものでした。

「俺はもう碁は嫌いだよ。もう知らねえよ。しかしね、お前が本当に打とうと言うなら賭碁で来い。賭碁でなら打ってやるよ」

それで、初めは煙草を十箇ずつ賭けることにして、燐寸の軸木を煙草の代りにした。ところが珍品堂が勝ち込んで行くにつれ、川路は賭を倍々にして、いっぺんに元を戻そうとしているのです。燐寸の軸木が珍品堂の手元にどっさりたまりました。

「お前、やけのやんぱちだな。そんなに賭けたって、こんな何百箇も煙草が買えるのか」

そう言うと、山路は金なんか持ってないと嘯いている。

「じゃお前、そこにある椅子を賭けろ。お前、今までに幾ら負けたって、俺に金を払ったことがないよ」

「金なんか、ねえから払わねえのさ」

「お前、俺が負けると、遠慮会釈なしに何か品物を持って行くだろう。その場にあるものは、なんでも持って行く。お前が負けると、すっぽかして、タンマだと言うのがおきまりだ」

「お前の、そういう口惜しさはわかるよ。わかってやるよ。俗物の口惜しさというやつだよ。それがわからなくってどうすると言うんだ」

それは山路のうちで対局しているときでした。珍品堂は口惜しくてならないので、こいつ、いっぺんやっつけてやろうと思って物色すると、その部屋にはウィンザーの一脚十万円くらいの椅子やテーブルなんかがあった。その椅子を四脚とテーブル一脚を賭けて、山路を負けにさせました。いつだって山路は、負けても賭けた物をよ

こしたことがなかったので、珍品堂は翌日の朝早く山路のうちへトラックで乗りつけ、細君に戸を明けさせて、

「昨日、俺は賭碁に勝って椅子とテーブルを取ったから、貰いに来たよ。貰って行っちゃう」

と、山路が目をさまさない間に、どんどんトラックに運ばせて、自分のうちへ持って帰った。

すると山路が、夕方ごろ珍品堂のうちへやって来て、仕様がなさそうに言うのです。

「あれは売らないでおいてくれ。俺が買いに来るからね。必ず来るよ」

「そんなこと言ったって、お前なんか金がないから買いに来れないだろう。でも、来たら売ってやらないものでもないよ」

これで珍品堂は溜飲を下げたので、山路が受出しに来るのを心待ちにしていましたが、二週間たっても三週間たっても来ないのです。山路は稼ぐごうと思えば、デザイン描いても、または骨董を一つの店から次の店へ動かしても稼げるのですが、口惜しがっている筈なのに超然としているように見せて受出しに来ない。人の上手を行くのです。山路の意地っぱりには相当の奥行があるようです。何という土性骨だ。山路は不断から人の前で激昂したところなんて見せないのです。そのくせ年に似合わず底ぬけのロマンチストです。

では、もっと口惜しがらせてやれと、珍品堂は椅子とテーブルを知りあいのお屋敷へ納めてしまった。それで山路は口惜しくて仕様がないのです。歯ぎしりするほど口惜しかったことでしょう。ぶらりと珍品堂のうちへ遊びに来たような風をして、持って来た安い火箸と高い火箸を取りかえて持って行ってしまった。

「この野郎、俺のところへ来て、妙な口惜しがらせをしやがった」

今度は珍品堂が山路のところへ遊びに行って、

「おい、このコップ貰って行くよ」

フランスのバカランのいいコップですが、これを持って来てしまった。山路は日常でも凝ったものを使っているのです。

今度は山路が珍品堂の留守のところへやって来て、例の碁盤を持って行ってしまった。もう骨董屋の宇田川には譲らなくてもいいだろうと思われる碁盤ですが、もしものこともあるだろうし、腹も立つので山路のところへ取返しに行くと、碁盤のおもてを鉋で削って藤原の仏像を置いている。しかも山路のやつ、泰然とそっくり反って煙草をふかしながら言うのです。

「おい顧六、この台はいいだろう。仏様を乗っけるのに、ちょうどいいだろう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo